

アーク

氏名	神崎 ちひろ
学籍番号	52553046
所属ゼミ	小説ゼミ1

はじめその建物を見たとき、僕は水の上にさびしく立つ巨人のようだと思った。ところどころ窓から漏れる光は、どこまでも続く真つ黒な水面に映って揺れ動き、きらきらと輝いていた。

「あそこがアークなのね」

あと数日漕いだら壊れてしまいそうな小さなボートの上で、後ろから聞こえた母さんの声は、今にも泣き出しそうな希望にあふれていた。

アーク

ボートを建物の窓に横付けし入り込もうとすると、中から大きな男たちがやってきて、いろいろな言語で母さんに何かを聞いてきた。母さんはつたない英語で、ホテルが水に沈んだことや、父さんがいなくなったことを伝えているようだった。数日間何も食べていなかった僕は力も出ず、ただボートにうずくまっていた。「不要放棄希望（希望をすてるな）」父さんの言葉を思い出す。悪魔のように襲いかかる黒い水の中を進みながら、父さんは何度もそういった。あれから二週間、まだ雨は降り続け、世界は水に沈んでいく。希望なんて忘れるほどに僕は疲れていた。後から聞いたところでは、ピッパがそんな僕の様子を見て、かわいそうだから入れてあげてと言ったらしい。男たちは不満そうな顔をしながらも、僕の頭を順番にガシガシと手で、中に入れてくれた。

中にいる人たちはその建物を「アーク」と呼んでいた。元々は高台にたつ学生や研究者が住む寮だったらしい。僕たちが暮らすことになったのは少し汚れた白い壁に簡素な鉄の扉が付いただけの部屋だったが、みんなが集まる三階部分には紺色のふかふかした絨毯が敷かれ、シャンデリアが五つもある広いホールもあった。

サムエル爺さんによれば、アークというのは方舟という意味らしい。神様が人間たちに怒って洪水を起こした時に、選ばれた人間や動物が乗った「ノアの方舟」に重ねて、誰からともなく呼び始めたという。サムエル爺さんは「ノアの方舟なら善人だけが乗るはずだ。でも、ここは全然違う」と笑っていた。そうだとしたら、僕だつてここにいられるかはわからない。父さんの命と引き換えに助かった僕は、善人だとはいえなかった。いい人ってどんな人だろう。考えると胸が苦しく、その先へいけなかった。

踊れるということ

夕食のときに、大人たちがお酒を飲んでた。母さんも少しだけ飲んで、静かに外を眺めていた。父さんのことを考えていたのかもしれない。誰かが歌い出し、ピッパやロバートはそれにあわせて自然に体を動かし踊り始めた。僕も一緒に踊ろうとしたが、体をどう動かせばいいのかわからなかった。ロバートの二歳の息子はおしりを動かし、上手にリズムを取っている。息を吸うように踊れるのがうらやましかった。僕は仕方なく邪魔にならないように端っこで踊る人たちを見守った。心の中にあるものを当たり前のように出せる力が僕にも欲しかった。

殴り合い

アークではいろんな言葉が飛び交っていた。いくつかの言語をしゃべれる人もいたが、英語やスペイン語以外となると、わかる人は少なかった。何を言っても通じないと、同じ場所

にいても、おいてきぼりになる感覚が怖かった。伝わらない会話は、殴りあいになってしまふこともあった。母さんは嫌がっていたが、僕は内心それを楽しみにしていた。けんかが起きるたび、僕は最前列で見守った。殴る側にも殴られる側にも自分が重なる。こぶしが身体にあたるバチツという音、汗のにおい、周りで見守る人たちの息づかい、そして勝者の一瞬の栄光にゾクゾクした。

歌声

夜中にけんかを見てから部屋に戻ろうと廊下を歩いていると、窓の外に、僕ぐらいの子供の姿が見えた。その夜は珍しく雨が止んでいた。気になってテラスからのぞき込むと、新しくアークに来たクヌーズという子だった。そばかすのある白い肌に、くせのある金髪で、絵本のなかの天使のようだと僕は思っていた。クヌーズは言葉の問題なのか、誰とも話さなかったが、その時は、真つ暗な水を前に静かに歌っていた。泣いているようだった。歌詞はわからなかったが、高音に響く歌声は美しく、悲しかった。

しおり

クヌーズに話しかけてみた。「昨日、きみの歌を聞いた。とてもきれいだった」片言の英語で伝えると、何も言わず下を向いた。恥ずかしがっているのか、言葉が伝わらなかったのか。歌を聞かれたくなかったのかもしれない。僕が静かにそこから離れようとすると、クヌーズは僕を追ってきて、少し震えた手で一枚のしおりをくれた。水浸しになったこの世界で、本を読むことはまずない。しおりを持ち歩いていることに驚いた。しおりは小さな紫色の花を押し花にして、透明なシートではさんだものだった。

ピッパとアミット

アークでは、思っていることを言葉にできないと、考えていないのと一緒だった。人気者は決まって話し上手だった。イギリス人のピッパは嫌みなく人をからかうのが上手で頭がよく、アークのリーダーのようになっていた。インドから来たアミットは背が高くがっしりしていて、ユーモアを交えた演説がうまかった。部屋割りや食べ物の話で問題が起こつても、最後には彼がうまくまとめた。子供が遊んでいると、イライラして怒鳴ってくる大人もいたが、ピッパやアミットは、そんな大人たちも笑わせて僕らを助けてくれた。

話さない人

水のすぐ近くだと、建物にカビが生えるらしい。今日は大人たちが数十人がかりでアークの掃除をしていた。楽しい仕事ではないはずだったが、雑談しながら一緒に作業をすると仲良くなるようで、仕事が終わる頃には不思議な一体感が生まれていた。仲良くなった人たちは、食事や仕事でも、友達を誘ったり、いいものを譲りあったりしていた。母さんみたいにあまり話さない人は、そういう輪になかなか入れず、かわいそうだった。

住む場所

僕たちは来た時から変わらずアークの四階部分に暮らしていた。学生用の一人部屋で、机と小さなベッドが一つあった。最初はみんな同じ作りの四階と五階に住んでいたが、ピッパ

やアミットは話し合いが多いので、大きい部屋のある八階に移っていった。ロバートやブラッドも話し合いに参加しやすいようにと七階に行った。僕は食堂や遊び場がある三階に近い今の部屋が好きだったけど、サムエル爺さんは、「こういうので、階級の上下は生まれるんだ」と言っていた。確かに、いつのまにか、それぞれの階で、仕事に分かれるようになっていた。アークをどうするか会議はだいたい七階より上の住民の間で開かれ、掃除や泥かきとは三、四階の住民がした。

遊び

今日は小さい子たちと、かくれんぼやおいかけてっこをして遊んだ。話す言葉は違ったが、遊びをする上ではあまり関係なかった。この前は大人たちが集まって真面目な話をする横で、こっそりと変顔をしながらは笑いをこらえるゲームをした。誰かが吹き出したりすると、殴られることもあったが、そのスリルが面白かった。時々僕は、細い目や中国なまりの英語をからかわれたが、気にしないふりをしていれば問題はなかった。ここではひょうきんものを貫き、時にはその特徴を強調した。

ジェフ

ジェフは大人たちとはあまり話さなかったが、僕たちとはよく遊びたがった。特に追いかけてこの鬼になるのが好きで、小さい子ばかりを追いかけては捕まえて、いつまでも放さなかった。時々、自分の部屋と一緒に遊ぼうと子供を誘ってくることもあった。友達の話では、ジェフの体を頼まれた通りに触ると、お菓子をくれるらしい。僕は何となくジェフが嫌で、アミットにそのことを話した。アミットは、心配をかけるからピッパには言わないでと言った。数日後からジェフを見かけなくなった。

好きなもの

子供達の情報によれば、クヌーズはアメリカに長く住んでいて、洪水で両親とはぐれ、アークに一人で来たらしい。洪水のショックで言葉がうまく出なくなるシツゴシウになったという噂だった。ここでは同じ北欧系のエマと一緒にくらしていた。僕は、眠れない時、クヌーズにもらったしおりをよく見つめた。見ているうちに、この花はクヌーズの好きなモノなのではないかと思うようになった。こんな世界で、自分が好きなものをひとにあげるのか。クヌーズは本当に天使かもしれない。僕は何が好きだろう。最初に思い浮かんだのは、前に飼っていた犬のココだった。考え始めると教えなくなり、僕はココの絵を描いてクヌーズに見せた。小さくて、僕にとってもなついていたんだと説明したら、わかってくれたのか優しく笑った。それから僕は、交換日記のように好きなものを教え合うようになった。クヌーズは、前に住んでいた家の自分の部屋や飛行機。僕は青い鉛筆、ソーセイジ、ゾウなどを描いて伝えた。好きなものについて考える時間は幸せだった。目の前にある洪水の世界をこの時だけは忘れることができた。

アレックス

アークに英語、スペイン語、中国語がわかるというアレックスが来た。「これでみんなの言いたいことがわかる」と、みんな大喜びだった。大切な会議にはほとんど彼が出るように

なり、部屋は七階に決まった。中国語を話すのは難しいといって、僕らがアレックスの中国語を聞くことはなかった。なぜか僕らから目をそらすように話すのが気になったが、そういうクセなのだろう。一度、僕たちとスペイン語を話す人たちの間で、もめたことがあった。年長者を敬う中国や韓国の大人たちが、他の人たちの高齢者への態度について注意したのがきっかけだった。その場でも、アレックスが通訳したが、どこまで僕たちの考えが伝わっているのかはわからなかった。結局、食糧や物を分ける時の公平性の話になり、グループごとに決めるルールになった。彼らは去り際、赤いポロシャツを着ていたウェイ爺を顎で指して笑っていた。どういう意味かはわからなかったが、バカにされていることはわかった。

誤解

母さんは時々調理係として、アーク全員の食事を用意するようになっていた。中国でも母さんは近所のおばあさんに、食事を持って行き、世話を焼いていた。母さんは言葉にはしなないが、調理係の仕事を楽しんでいるようだった。鼻歌まじりに献立を考えている様子をみると、僕も嬉しかった。調理係は基本的には全員に同じ食事を作っていたが、体調を崩し食べられない人も増えていた。ある日、母さんは彼らのためにおかゆを作った。母さんは作る前に料理長にそれを説明していたが、うまく伝わっていなかったらしい。長くもつ米は食べ物の中でも貴重品だ。おかゆという中国料理だったことも誤解を生んだ。勝手に米を使ったと問題になってしまった。母さんは調理係を辞めさせられ、しばらく食糧保管庫へ近づくことも禁止された。まるで犯人扱いだった。僕が我慢できず何か言ってやろうとすると、母さんは止め、静かに「自分が正しいと分かっているよ」といった。

クヌーズの罪

僕は悔しくて、誰とも遊ばずに、外のテラスで雨を眺めた。ずっと嫌だと思っていた雨が、こうしていると、やさしく僕を包み込んでくれるように感じた。洪水になって初めて、未来について考えた。いつまでもここにいないわけには行かない。僕はいつか母さんとここを出るだろう。それまでに、僕はもっと強くならなければ。そう思った。大人たちの話によれば、この世界的な豪雨もいつかは止み、水は引いていくらしい。ここを出たら何をすればいいんだろうと考えるが、ふと横を向くと、クヌーズがいた。雨の音で、ドアを開けた音が聞こえなかったのだろう。クヌーズは、お菓子の袋を開け、一緒に食べようという。僕たちは何も話さず、一緒にスナックを一つ一つ口に運んだ。食べ終わって手をはらっていると、クヌーズが僕の肩をたたき、しおりを出せといっているようだった。僕がポケットに入っていたしおりを出すと、クヌーズは、メモ帳を出し「SINI」と書いた。これはクヌーズのSINIなんだという。「罪？」よくわからず、クヌーズの顔を見つめると、クヌーズは順に説明し始めた。どうやら、彼は、洪水の前に、このしおりをどこかで見かけ、盗ってしまったらしい。好きな子の物だったのか、売っていたものなのか、そこはよくわからなかったが、しおりをきれいと思いながらも、いけない事をしたという思いはずっと抱えていた。その後に洪水が起き、両親とも離れたクヌーズは、この罪こそが、すべての原因なのだと考えているようだった。でもしおりを捨てることもできず、クヌーズは、たまたま声をかけてきた僕に渡したということらしい。言葉は聞き取れなかったが、クヌーズは泣きながら謝っているようだった。僕はクヌーズの手からしおりをとって、また自分のポケットにしまった。きちんと伝わ

るかわからなかったが、僕はこのしおりが好きであること、僕がこのしおりを幸せのしおりに変えるつもりであることを伝えた。

崩壊の種

食糧調達のため水中に潜った作業班から、アークが立つ高台の一部が崩れ始めているという報告があつたらしい。崩れた部分は水が濁り、細かいことはわからなかったそうだが、大人たちはずいぶん心配していた。食糧保管庫から食べ物盗まれたり、家具でボートを作り始めたりする人もいて、いざこざが何度も起こった。ただでさえ、みんながイライラしているのに、訳さなければその場で終わる嫌味や悪口をアレックスが翻訳し、関係がさらに悪化することもあった。僕の目からはアレックスが小さな対立をわざと大きくしているように見えた。それでいて、どちらの立場もわかるような顔をして、うまく立ち回ろうとしているのが嫌だった。これにはサムエル爺さんも同じ意見だったようで、ある時僕がアレックスをにらんでいると、サムエル爺さんが僕の頭の上に手を置いて、言った。「ああいうやつはどこにでもいるもんだ。バベルの塔の建築を妨げたのだって神じゃない（※1）。本当はああいうやつなんだ」。半分はよくわからなかったが、僕は強くうなずいた。

僕たちのことば

クヌーズが、スペイン語を話すリタの話を聞いている様子から「わかるの?」と聞くと、うなずいた。クヌーズが話せたらいいのに。僕たちは暇な時間に○や×、嬉しい、悲しい、おいしい、洪水…など、手話のようなものを作って会話するようになった。やり始めてみると暗号を使ったスパイゲームのようで、周りの子供たちも面白がつて参加した。例えばアレックスには「乱し家」というあだ名をつけ、右手でクルクルと竜巻を作ること以示したり、アークは手でAを作ったりして、二週間もすると案外いろんな会話ができるようになった。

ある時、またアークでいざこざがあつた。高台が崩れ始めているのなら、潜って直そうという人たちと、崩れる前に早く新しい場所へ移ろうという人たちの対立だった。英語とスペイン語が混ざった会話で、やはりアレックスが間に立っていた。周りでは僕たち子供も見守った。誰かが、「このままではみんな死ぬことになってしまう。それでもいいのか」といい、アレックスが訳すと相手は怒り始めた。相手を責めるような言葉に訳しているようだった。僕がため息をついていると、大人たちが一瞬静かになり、そしてどよめきが起こった。何が起きているのだろう。大人たちの間をかき分けていくと、みんなの真ん中にクヌーズが立ち、僕たちの作った言葉で「違う」と表現していた。何か言おうとしている。「違うって言うって」と僕が言いかけた時、リタも大きな声で「ちがうって言うてる!」とスペイン語で話した。クヌーズが言いたいことを僕とリタが言葉にしていた。「そんなこと、言っていない」「このままなら死んじゃう。何かしなきゃって言うてる」「喧嘩しないでみんなが助かる方法を見つけないと」。言い終わるとリタは恥ずかしそうにクヌーズの横に立った。大人たちの間で賛同する声が上がった。拍手する人もいた。途中から見ていたアミットが間に立ち、「子供達にもわかるんだ。僕たちは、もう争いをしている場合じゃない」。今一番いい方法はなにかについて、改めて話し合いが始まった。クヌーズはリタに支えられるようにして輪の外に出たと思ったら、骨がなくなった人みたいに足から崩れ落ちた。怖かったのだろう。

僕はリタと顔を見合わせて笑い、クヌーズを抱きしめた。

プレゼント

無線が繋がるようになり、他の場所の人たちの動きもわかるようになった。クヌーズの両親が生きている可能性があることがわかり、エマとクヌーズはそこへ行ってみることにした。簡単な送別会が行われ、僕はクヌーズと一緒に食べたスナックの包装紙で作ったしおりを彼に贈った。もらったしおりは、クヌーズの勇気を思い出させる、僕が強くなるためのお守りのようだった。「もらったしおりは僕が持っていたいんだ。いい？」と聞くと、クヌーズはうなずいた。そしていつから隠し持っていたのか、天使の顔とは程遠い変顔をきめた。

正しさ

母さんは正しい人だ。小学生になって、一人で外を歩くようになって、周りの人から、あなたのお母さんはすごいねとよく言われた。例えば、僕が五歳ぐらいの時、住んでいた場所が台風の被害に遭い、水も電気も止まったことがあった。スーパームもいつ開くかわからない時に、母さんは家にあった電気コンロと水、お米と冷凍ギョーザで炊き出しを始めた。結局三日ぐらいで水や電気は復旧したが、「あれでだいぶ助かった」と近所の人から言われた。母さんは僕にも正しい人だった。門限にしる、片付けにしる、家の中の仕事や、おやつを食べるタイミングにしる、僕と同じルールに従った。それが当たり前なのだとずっと思っていたけれど、他の家のことも知るようになると、母さんは随分真面目なのだと気づくことになった。一度、母さんになんでそんな風にするのか聞いたことがあった。母さんは、「そうやって、これまで十分に幸せだったから」と答えた。

母さんの父親、つまり僕の祖父ははじめとは言えない人だった。借りたものは返さず、約束も守らない。女のひととの関係もいろいろあったようで、母さんが十三歳の時、祖母は家を出て行ってしまった。父親への反発から余計に正しさにこだわったと母さんは言っていた。高校卒業後は食堂で働き、そこで大学生の父さんに出会ったらしい。父さんも正しい人ではあったが、時々母さんに内緒でお菓子を買ってくれたり、好きな物を買ってくれたり、ルールに従う正しさではなかった。だが、二人は仲が良く、僕がベッドに入ってから、居間からはよく二人の笑い声が聞こえた。

アメリカ

父さんが学会でアメリカに行くから、僕たちも一緒にどうかと聞いた時、母さんは迷わず行くことを決めた。パスポートの準備などは大変だったはずだが、その作業の間でさえ笑顔がこぼれ、荷造り中には鼻歌まで聞こえてきた。母さんは、父さんが大学院でアメリカに留学した時に一度も会いに行けなかったことを後悔していたらしく、初めてのアメリカを楽しむにしていた。

結局、アメリカに来てから始まった豪雨で学会は中止となり、僕らはホテルに缶詰めになった。真夜中に川が決壊し、泊まっていたホテルに水が流れ込んだ時、僕はぐっすり眠っていた。父さんに起こされた僕は状況がよく分からず、父さんが止めるのも聞かずに奥の部屋にゲーム機を取りに行った。部屋を出ようとした時には、水が腰の高さになっていた。廊下は外から流れ込む水で川のようなだった。父さんは僕を抱えて逃げ、怖くて泣いてしまう僕に

何度も「希望を捨てるな。大丈夫」と声をかけた。もう少しで非常口ということで、建物がきしみ始め、廊下がどんどん沈んで行った。なんとか非常口に押し上げてもらって僕が振り向くと、廊下は崩れ、目の前には瓦礫と黒ずんだ濁流があるだけで父さんの姿はなかった。外にいた母さんと何度も父さんの名前を呼んだが、父さんは見つからなかった。

母さんのヨブ記(※2)

母さんはもともと無口だったが、父さんがいなくなってからは、さらに話さなくなった。食欲もないようで、じぶんの食事をほとんど僕に食べさせ、みるみるうちに痩せていった。髪も所々抜けてしまい、手や顔も掻きむしって皮が剥け、赤くただれたようになっていた。感染症にはみんな敏感になっていった時期だった。最初は母さんに親しげに話しかけてくれた住人も、母さんとは距離を取った。母さんが近くを通るだけで嫌な顔をする人もいた。それでも母さんは相変わらず正しくあろうとしていた。寂しい様子は僕には見せず、僕が落ち込んでいると抱きしめてくれた。アークの仕事分担で、力仕事割り振られてしまった高齢者がいると、代わってやつてあげることも何度もあった。母さんは一生懸命明るくしていたが、僕が夜に目が覚めると、こちらに背を向けて寝ながら体をふるわせる母さんを見ることがあった。あれはたぶん泣いていたのだろう。

ある日、母さんが呼び出され、いろいろと聞き取られたことがあった。サムエル爺さんによれば、アーク内のスペイン語を話すグループで、食べ物や物をもらい仕事を肩代わりすることが問題になったらしかった。やっていった男は、最初は自分だけでその仕事をしていたが、だんだん人を雇うようになり、給料を払わないこともあったという。取り調べの中で、母さんの行動を参考にしたと言ったことで、母さんまで疑われることになったのだ。数少ない持ち物が押収され、母さんは英語で尋問された。仕事を代わりにやったことを責められているのだと思った母さんは「高齢者のためだ。何がいけないのか」と中国語で言い、それが容疑を認めたようにとられて状況を悪くした。結局、母さんは解放されたが、無実が証明されたわけではなかった。特に男がいたグループからは、疑いの目で見られるようになった。僕は子供たちの間で時々嫌がらせを受けるようになった。仕事や勉強を「代わってくれよ」とからかわれたり、仕事でもらった食べ物があるだと、配られたお菓子を取られたりした。母さんにはずっと秘密にしていたが、あるとき部屋に戻ると、母さんが腕組みをして立っていた。「嫌がらせをされているの？」僕がうなずくと、母さんは僕の顔をじつと見て、悲しそうな顔をした。母さんは、ベッドに座り、口に片手を当てて考え込んでいるようだった。「まるで、パンドラの箱ね。不幸ばかりが次々と起こる」母さんがつぶやいた。母さんのなかで何かが変わったようだった。その日、母さんは初めて僕らの就寝時間、午後十時を過ぎても起きていた。部屋の窓を開けて頬杖をつきながら、ずっと外を眺めていた。

父さんの絵

廊下を歩いていると、リタが興奮気味に額縁を持って僕の所に走ってきた。「お父さんの名前って、Wang Xiだったよね？」前に漢字の意味を説明したときに、例として僕の父さんの名前を挙げたことがあった。それを覚えていたのか。僕がうなずくと、リタは目を大きく見開いて、額縁を裏返して僕に見せてきた。そこには、確かに父さんに似た字で「王希 Wang Xi」と書かれ、「Hope remained on the edge of the box (箱の縁には希望が残った)」と

英語で書かれていた。表を見ると、そこには箱を開ける、きれいな女性が描かれていた。リタによると、部屋に掛けられていた絵が何の絵なのか気になって裏を見ると、僕の父さんの名前が書いてあったのだという。もしかして、父さんが留学したときに、このアークにいたということなのだろうか。僕はリタとホールの外に飾られている記念写真を一枚一枚確認していった。写真はバーティか何かの後に撮ったものなのだろう、みんな自分の国の伝統衣装に身を包み、笑顔で映っていた。写真の下には名前も添えられていた。一時間ぐらひは探しただろうか。リタの興奮した声に呼ばれて一枚の写真の前に立つと、そこには若い頃の父さんがいた。めがねを掛け、紺色の伝統衣装を着て笑っていた。ちょうど二十年前、父さんはここにいたのだ。

縁縁を持つて、母さんのところへ走った。母さんに絵と父さんのサインを見せると、母さんは驚き、そして泣いていた。久しぶりに父さんの字を見て安心したようにも見えた。しゃくりあげるように泣いて、しばらくは話せないほどだった。母さんは落ち着きを取り戻すと、父さんが教えてくれたというパンドラの箱の物語を話してくれた。絵に描かれていた女性はパンドラといって、プロメテウスという神様が天界から火を盗み、人間にあげてしまったことに怒ったゼウスが、人間界に送ったのだという。パンドラには、神様たちから知恵と美、美しい歌声と癒やし、ゼウスから好奇心が与えられていた。パンドラは、夫である神のエピメテウスが出かけた時に、家にあった美しい箱を開けてしまい、そこからは病氣や盗み、憎しみなど人間を苦しめるありとあらゆる物が出てきて世の中に広がってしまったのだという。「慌ててパンドラが蓋を閉めると、箱の縁に希望だけは残っていたんだって」。父さんはこの話が好きだったらしい。この絵を部屋に掛けて何を思ったのだろう。父さんは母子家庭でお金がなく、大学進学も、留学もいくつもの奨学金を組み合わせて何とか実現し、研究者になった。希望が、父さんを強くしたのだろうか。

母さんの中の父さん

母さんによるとパンドラという名前は、全てを贈られたものという意味があるのだという。母さんの名前は「万恩（あらゆる恵みを授かった者）」だ。「じゃあ、母さんの名前と一緒にじゃない」と僕が言うと、母さんは驚いた顔をして、嬉しそうに笑った。

リタは父さんのことを話すと喜び、絵を僕たちにくれた。母さんは絵を僕たちの部屋の壁に飾って、毎日、まるで父さんにするように、語りかけた。もちろん何も言葉は返ってこないけれど、母さんはアークで起きたことを話しながら、少しずつ笑顔を見せるようになった。時々、僕も参加して僕らの新しい生活を報告した。母さんの食欲がだんだん戻った。顔や手を掻くことも減り、一週間もすると赤みはなくなった。母さんにとつての父さんの大きさに、ただ驚くばかりだった。父さんの名前「希」には希望という意味が込められている。パンドラの手元に残った希望のように、父さんが残した希望が少しずつ大きくなって、苦しみの中にいた母さんを包み込んでいくようだった。

「ノア」の思想

洪水はもう一カ月以上に及んでいた。アークの周りで避難所となっていた建物では食べ物がなくなり、そこから出た人たちがアークに次々と押し寄せた。最初は話を聞いて受け入れていたが、一日に何十人も来るようになると、住民をもっと選ぶべきという声が出始めた。

特にアミットは、そう主張する集団のリーダーのようになっていった。住民たちの集会では前に立ち、「僕らがなぜこのアークに導かれたのか。それは僕らが生きるとき使命を与えられたからだ。僕らこそノアなのだ」と訴え、受け入れはできるだけ絞るべきと主張した。アミットの演説は、住民たちの大きな歓声で迎えられた。ピッパは、危険な考えだと反論したが、自分たちがノアだと思い始めた人たちに、ピッパの声は届かなかった。それから入ってくる新しい人たちには厳しい面接が行われ、合格するのは、ほとんどが若く元気で話の上手い人だった。

線引き

大人たち十数人が命綱をつけて水の中で作業することになった。アークが傾き始めていることが分かり、建物を下から木材で支えることになったらしい。だが、ショベルカーやクレーンもない。「材料を運ぶだけで三日もかかった」と作業班のリーダーになったロバートがため息をついていた。六日目、水中で土を掘る作業をしている時に、大規模な土砂崩れが起きた。作業中の人たちは流され、土砂やがれきに埋まった。十一人は何とか救助されたが、ベトナム人のクオンとフンは行方不明になった。

作業を続けるかどうか話し合いがもたれた。土砂崩れは建物自体にはまだ影響していなかったが、高台が危ないことは確かだった。事故があったことを考えて、作業を延期し、新しく安全対策をとろうという人たちもいたが、建物を守るためにとにかく早く対応すべきだという声も多かった。「アークを守るためと考えれば、彼ら二人の犠牲で済んでよかった」という人までいて、クオンたちの家族は怒っていた。前にサムエル爺さんがバベルの塔の話をしたときに言っていたことを思い出す。「人々が最高だ、素晴らしいといって作り上げていくものは、決まって内部から壊れていく」。結局、アークの補強作業は再開が決まった。

僕たちの遊び

父さんの絵の一件以来、僕はリタとよく遊ぶようになっていた。アークは、増築を重ねた建物らしく、構造が入り組んでいて、迷路のように階段が散らばっていた。僕らは誰かに目的地を決めてもらい、どちらが早く到着できるかを競ったり、宝探しゲームなどをしたりして遊んだ。リタは絵がうまく、時々「宝の地図」を作って、子供が入ると怒られる部屋や怖い大人を島や怪物に見立てたりもした。実はサムエル爺さんからこんなふうに遊んでみたらいいと言われて始めた遊びだったけど、空想しながらアーク内を冒険するのは楽しかった。

崩壊

お昼を食べて、まだ部屋にいたときだった。アークを地震のような揺れが襲った。ゴゴゴと下からえぐるような揺れがあったと思ったら、建物全体がぐらつと傾き、ガシャーンとお皿やシャンデリアが割れる音が響いた。天井や床が傾き、ボロボロとがれきが落ちてくる。誰かが「崩壊が始まった。逃げる」と叫び、アーク内は大騒ぎになった。僕は、部屋に掛けてあった額縁を下ろし、絵を額からはずして服の中にしまった。クヌーズのしおりはポケットにある。母さんと部屋を出ると、外に出ようとする人で大階段はあふれ、押されてけがを

する人もいた。壁や床からピシピシという音が聞こえる。崩壊はどんどん進んでいるようだった。急がなければならぬ。僕は、遊びで知った隠れた別の階段へと住民を案内していった。逃げる人たちの流れができると、母さんが「私たちも逃げよう」と僕の手を引いた。二階の非常ドアから飛び降りようとする、中から泣き声が聞こえる。中央部の階段横でロバートジュニアが泣いていた。ロバートたちとはぐれたようだった。僕は急いで戻ってジュニアを抱きかかえ、ドア横で待っていた母さんと一緒に水の中へと飛び込んだ。三階や四階部分からも人々が次々と水の中へと飛び込んでくる。アーク内では火の手が上がり、煙で中が見えなくなった。ガラスが割れる音がし、叫び声が聞こえた。僕は、流れてきたドアにつかまり、少し遠くから崩れてゆくアークを見守った。アークは下部が崩れ、そこに覆い被さるように上部はそのままの形で水面に倒れ込んでいった。アークが可哀想に思えたが、なすべはなかった。倒れると大きな波が起こり、僕たちはドアに必死につかまった。後には大量のがれきが残るばかりで、アークと呼ばれたことが嘘のようだった。最初は泣いていたロバートジュニアも、崩壊するアークを前に驚いたのか、ただじっと見つめていた。

出 発

ドアにつかまりながら、ぶかぶかと浮いていると、一台のボートがこちらの方に向かって近づいてきた。漕いでいたのはロバートだった。ロバートは残っていたボートで、水の中に落ちた住民を引き上げる作業をしていた。階段でみんなを誘導しているうちに、横にいたはずのジュニアがいなくなってしまうのだという。僕らを見つけると大きな声でジュニアの名を叫び、僕ごとがっしりと抱きしめ、ありがとう、ありがとうと何度も繰り返した。ロバートによればリタもピップもサムエル爺さんも無事ということだった。

僕たちは行き先ごとにボートに別れた。僕と母さんはロバートたちと一緒にまた別の場所をめざして進むことにした。ボートでロバートといろいろ話をした。ロバートもアークの終わりを予感していたらしい。「組織としてももう終わりを迎えていた。建物が崩壊して、むしろよかったかもしれない」とロバートはいった。この先どうなるのか僕にはまだ何もわからなかった。服の中から父さんの絵を取り出すと、額縁を失い、湿気を吸って、ふにやふにやになったパンドラが箱を開けていた。絵の中に希望は描かれてはいない。だが、父さんはここに希望を見ていたのだろう。

サムエル爺さんによれば、パンドラにはピュラという娘がいて、ゼウスが起こした大洪水を生き抜き、人類再生の象徴となったのだという。僕はピュラにはなれないだろう。僕は自分が弱いことを知っている。ただ、僕は自分が強いと信じることの怖さも知った。クヌーズのように、弱くても勇気が生む強さも知っている。「漕ぐの、代わるよ」ずっと漕ぎ手をしていた母さんからオールを受け取る。オールは思った以上に重い。母さんに教わりながら、体全体でオールを動かすと、ぐんと進んだ。一漕ぎ一漕ぎ、自分の身体で進んでいく。太陽がもうすぐ沈む。風が気持ちよく吹いていた。

(本文…一三三二六文字)

※1 バベルの塔…旧約聖書に出てくる物語。人々は同じ言語を使い、天まで届く塔を作ろうとするが、神が人々の言葉を混乱させ、建設は止まってしまふ。

※2 ヨブ記…信仰心があつく正しいヨブが神に試され、不幸に見舞われる旧約聖書の話。ヨブは妻以外の家族、財産を失い、皮膚病にもかかる。